

松江市史講座 2019年7月20日

出雲に來た渤海人

大日方 克己 (島根大学法文学部)

1. はじめに一渤海と日本

【1】渤海とは何か

1) 渤海の成立と滅亡

- ・698、高句麗遺民の大祚榮が牡丹江上流地域に政権を自立
- ・713、大祚榮、唐から渤海郡王として認められる→渤海国の成立
- ・926、契丹(遼)耶律阿保機の攻撃により滅亡

2) 渤海の政治、社会

- ・上京龍泉府を中心に、唐の政治・文化を取り入れた国家体制を整えた。
- ・頻繁な遣唐使(王子を唐に派遣することも多かった)、大量の留学生の派遣
- ・高句麗遺民、靺鞨諸族などから構成される多民族国家。

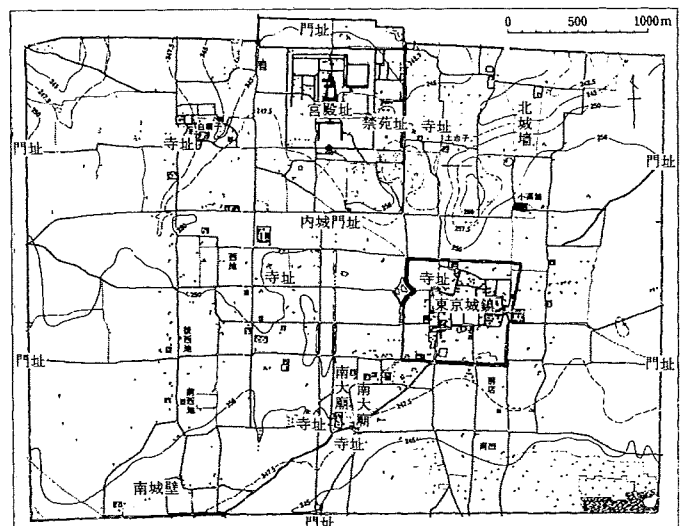
【2】日本と渤海の交流

1) 来航地の変化

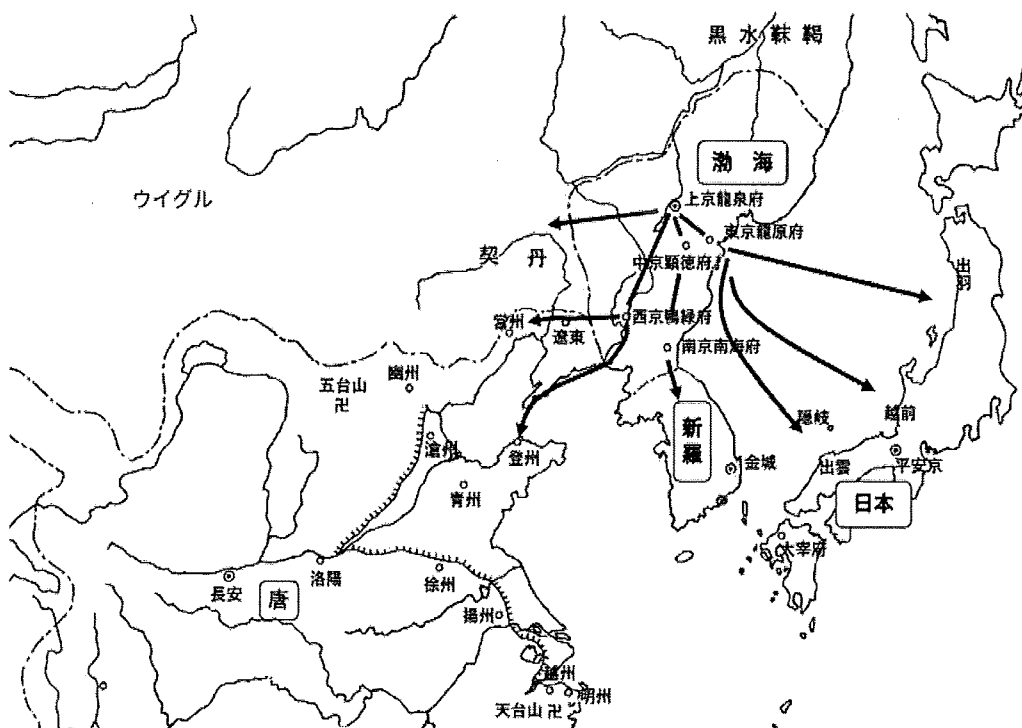
- ・8世紀 出羽～北陸 → 日本海北回り
- ・9世紀 山陰～北陸 → 朝鮮半島東岸南下

2) 渤海使との交易

- ・代表的な交易品・大量の毛皮(黒貂) 黒貂は北東アジア・内陸アジアから渤海に



上京龍泉府の遺跡実測図 (濱田耕策 2000、p 69、図 3 より)



2. 初めて出雲に來た渤海使-王孝廉

【1】王孝廉一行の足どり — 『日本後紀』より

弘仁 5((814) 9. 30 出雲國に來着 (年末までに入京)

入京したメンバー 大使・王孝廉、副使・高景秀、判官・高英善・王昇基、
録事・釈仁貞・烏賢偲、訳語・李俊雄

弘仁 6(815) 正. 1 朝廷の元日朝賀に参列

正. 7 七日節(白馬節会)に参列、叙位

正. 16 正月十六日節(踏歌節会)に参列。

正. 20 朝集堂での饗宴 (これ以前に嵯峨天皇への渤海國王の国書奉呈の儀)

正. 22 渤海王宛の嵯峨天皇勅書が託される (この日に出京か)

(5 月 出雲國を出航か)

5. 王孝廉らの船が遭難、大破して越前國に漂着。越前國で新船を建造。

6. 14 王孝廉、疱瘡で死去。続いて王昇基・釈仁貞も死去。

弘仁 7(816) 5. 2 渤海王宛の嵯峨天皇勅書が副使高景秀に託される。(この直後越前を出航か)

【2】王孝廉と漢詩の交歓

1) 『文華秀麗集』に収録された王孝廉たちと日本側貴族たちの交歓の詩

日本側・領客使坂上 今継(1 首)・坂上今雄(1 首)・滋野貞主(1 首)、桑原腹赤(1 首)

渤海側・王孝廉(5 首)、釈仁貞(1 首)

『文華秀麗集』 嵯峨天皇の命で編纂された勅撰漢詩集。弘仁 9(818)成立。編者は藤原冬嗣・仲雄王・
滋野貞主・桑原腹赤ら。

2) 王孝廉が出雲で作った詩

弘仁 6 年 2 月～5 月、出雲國で帰國のための風待ちをしていた。この間、領客使坂上今継・坂上
今雄らが、出航まで接待を続けた。

『文華秀麗集』卷上 贈答 41

従出雲州書情、寄両箇勅使。一首。 王孝廉

出雲州^よ従^{こころ}り情^{しる}を書し、両箇^{りょうこ}の勅使に寄す。一首。 王孝廉

南風海路速帰思。 南風^{なんふう}海路^{かいろ}帰思^{きし}を速し、

北雁長天引旅情。 北雁^{ほくがん}長天^{ちやうてん}引旅^{りょ}情^{じやう}を引く。

頼有鏘鏘双鳳伴。 頼^{さい}に鏘^{はひ}々なる双鳳^{しやうほう}の伴^{ともな}ふこと有り、

莫愁多日住辺亭。 愁^{うれ}ふること莫^なれ多日^{たじつ}住^{へん}亭^{てい}に住^すまふを。

[大意] 出雲國から自分の心を書きつけて、二人の勅使に寄せた詩。海路に吹く南の風は故國に帰ろうとする思いをしきりにかりたて、長く広い大空にける北から來た雁は旅のわびしい心をさそいよせる。幸いにもしょうしょう(鳳凰の鳴く声の擬声語)と鳴く雌雄つがいの鳳凰がわが航路につれだっている、したがって幾日も辺地の宿に滞在していることを憂えるには及ばない。

【3】渤海使はどこに滞在したか

- ・渤海使の航路 隠岐→出雲国島根郡(千酌駅家)
- ・安置供給地(滞在地)・・島根郡が多い
- ・出雲国府の財源(正税)から食料など供給される。

【4】王孝廉と空海 - 海を越えたネットワーク

1) 空海が王孝廉の死を知って作った詩

傷渤海王大使孝廉中途物故

一面新交不忍聴 況乎郷国故園情

〔書き下し〕

渤海王大使孝廉、中途に物故するを傷む

一面新交にして聴くに忍ばず、況や郷国故園の情においてをや

(『拾遺集』(密教文化研究所編『弘法大師全集』より)

〔大意〕一度会っただけの交わりの浅い自分さえ、訃報を聞くにしのびないのに、ましてや故郷の親縁者のこころのうちはいかばかりか

(高木神元訳注「拾遺集」)

☞空海は王孝廉と一度会っている。それはどこか?

2) 空海の王孝廉あての書状 (弘仁6年正月19日付、『高野雑筆』下)

信満が参上いたしました折には、一通の書状および一篇の新詩を贈られ、かたじけなく存じました。頂戴いたしました詩を愛誦して、倦むことを知らないありさまでございました。身は遠く北(渤海国)と南(日本)に離れて国を異にしていまいしょうとも、心は互いに近く通じあっていることとございます。ご芳情のほどは喜びにたえないことながら、直接にお目もじかなわぬことをおそれ、たてようもなく残念でございます。

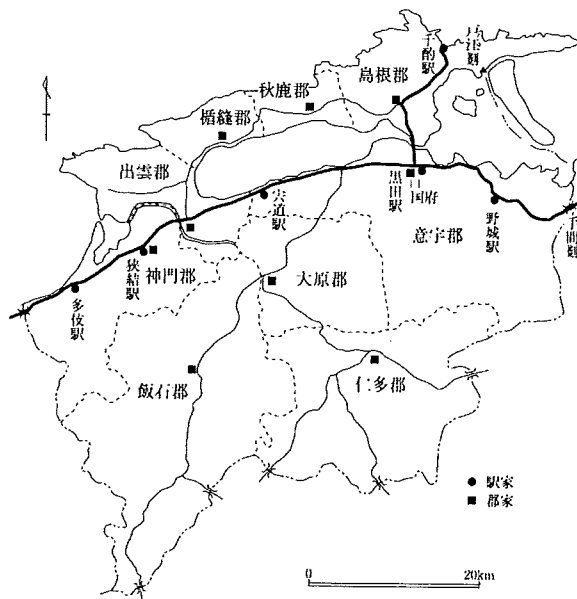
初春なお寒きこのごろ、王大使にはご健勝のことかと拝察いたされます。大使ご一行に対するわが国の待遇も、常の人に百倍するほどと承り、大慶至極に存じます。そのうちにお伺いいたそうと思いながら、使者の帰りが遅くてご様子がわからず、遂にお会する機会を逸してしまいました。まことに残念でございます。はっきりとは存じませんが、いつ頃、本国にご帰還なさいまいしょうか。また、さきに意見を徴せられて具申しておきました王大使がたの官位を詳しくお知らせいただければ、幸せです。謹んで信満をつかわしたてまつり、書状をたてまつります。不宣。謹んで記します。

正月十九日

西岳の沙門空海 しるしてたてまつる

渤海国の王大使閣下

(現代語訳『弘法大師空海全集』第七巻(筑摩書房)より)



(大橋泰夫 2016 より)

・王孝廉が入京したとき、空海は京の西、高雄に居た。高野山を開くのは弘仁7年(816)のこと。信満とは三上信満のことで、この時期、空海の使者として各所と書状の伝達をしていた。王孝廉は正月七日節で

従三位に叙せられている。空海がその情報を知らないのも、信満が王孝廉のもとに派遣されたのは正月7日以前か。王孝廉は正月22日に出京しているので、この書状はその直前ということになる。

→ということは、空海は王孝廉の在京中には会っていない。ではどこか？

3) 空海と王孝廉はどこで出会っていたのか？

❖『性霊集』卷五「藤大使の渤海の王子に与ふるが為の書」

渤海と日本とは、それぞれの土地は南と北に分かれ、人々は海によって分け^{へだ}てられています。しかし、隣国の交わりを善くし、交流の義を結び、互いに貴^{とう}んで往来し、進物を贈りあっています。昔から今に至るまで、この道の止むことがあったでしょうか。決してないのです。

私、賀能^{がのう}はかたじけなくも日本国より大唐国への朝貢大使として来朝し、偶然にも渤海国王子に拝謁いたしました。まったく予期しない面会でした。私の喜びもまた常のものではありません。いま仲春二月、ようやく気候は暖かくなりはじめました。私、賀能がひれ伏して思いますに、ご尊体の立ち居振る舞い、ご健勝のことと存じます。

私、賀能は朝廷に推された^{かんし}監使の監視を受け、引きとめられ妨げられて、再びお目にかかって心を申しあげることができません。なげき悲しんで心が前に進まず、この腸^{はらわた}を断つような苦しみに誰が堪^たえることができますでしょうか。今日、お別れを告げる、いつの日にかまたお会いすることができましようか。今、後ろ髪をひかれ、恋い慕^たう気持ちは任えられないものがあります。謹んで書状を差し上げ奉ります。意を尽くすことはできません。謹んで申し上げます。

(『弘法大師空海全集』(筑摩書房)口語訳を一部改変)

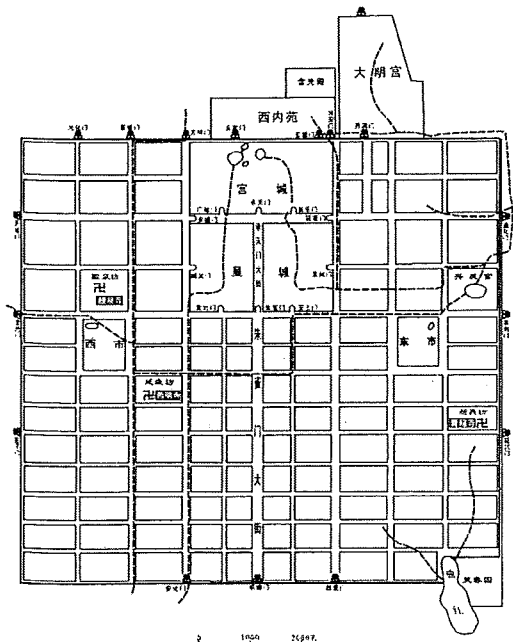
→ 遣唐大使藤原葛野麻呂(賀能)が渤海王子に送った書状、空海が代筆した

①遣唐大使藤原葛野麻呂と空海の足どり

・804(貞元20、延暦23)8月、遣唐大使藤原葛野麻呂ら唐・福州に到着。空海・橘逸勢らも同行。

12月21日、長安に入る

12月25日、大明宮麟德殿で徳宗皇帝に拝謁



空海関連三寺院の位置

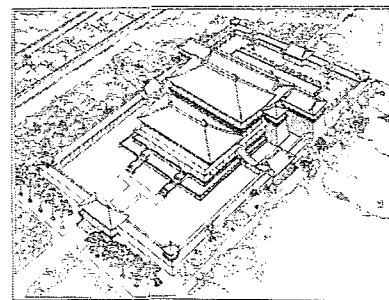


図10 唐大明宮麟德殿 平面図(上)・復元図(下)
(劉致平・傅熹年「麟德殿復元の初步研究」
『考古』1963-7より。一部改変)

- ・805(永貞元、延暦 24) 正月 1 日、大明宮含元殿での朝賀
正月 2 日、徳宗皇帝不予
正月 23 日、徳宗皇帝死去、皇太子が順宗皇帝として即位。
2 月 10 日、監使として内侍省常侍の宋惟澄が答信物を持ってきて、天子の葬事
なのですぐに帰国するよう命じる皇帝の勅を伝達。
→即時、大使一行は長安を出立
空海は残留して長安の西明寺に移る。
6 月 8 日、大使藤原葛野麻呂は対馬に帰着。
(以上『日本後紀』延暦 24 年 6 月 8 日条、葛野麻呂の帰朝報告)
- ・806(元和元、大同元) 4 月、空海は越州にいた。これ以前に空海は長安を出立してたはず。
10 月、空海、遣唐使高階遠成とともに博多に帰着。

②渤海の唐への朝貢

- ・804(貞元 20)11 月、渤海・新羅遣使朝貢
- ・806(元和元)12 月、渤海が遣使朝貢。
- ・807(元和 2)12 月、渤海が遣使朝貢。 (以上『冊府元龜』)

③空海・藤原葛野麻呂と渤海王子の出会い

- ・804 年 12 月 21 日以降に、渤海王子一行と面会し、再開を約束しながら、2 月 10 日に帰国することになったので、再度会うことができなかった。
- ・空海が代筆した書状も 2 月 10 日に書かれたとみてよい。
- ・藤原葛野麻呂一行と渤海王子一行が出会った場に、空海と王孝廉も居たのではないか。

3. 隠岐・出雲に來た渤海僧貞素、東アジアを駆けめぐる

【1】渤海使高承祖の來航

1) 渤海使高承祖、隠岐に來航

- ・天長 2 年(825)12 月 3 日 渤海使高承祖一行 103 人、隠岐に來着の報告。
12 月 7 日 大内記布留高庭を仮の出雲介として派遣。
→高承祖らは出雲国に安置供給

2) 入京させるか否か 朝廷の意見対立

- ・右大臣藤原緒嗣―入京を主張する「或る人」を批判、入京に反対
天長元年に頻繁な渤海使の來航に対し 12 年に 1 回の來航を通告。それを無視した來航に反発。渤海使の実態は「商旅」(商人)であり入京して客として遇するべきではない。朝廷の行事が多く多忙で、入京させると百姓の負担になる。

☞「或る人」とはだれか？ 嵯峨太上天皇？

- ・朝廷の動向 弘仁 14 年(823)4 月、嵯峨天皇讓位→淳和天皇即位

天長元年(824)、加賀國に來航した渤海使高貞泰らに、來航期限を12年に1回とすることを通告、入京させず來航地から歸國させる。藤原緒嗣の献策。

・淳和朝がめざした嵯峨朝外交からの転換

嵯峨朝の外交・・・頻繁に渤海使を迎え入れ、文化・經濟交流を展開。遣唐使を派遣せず、渤海を間にした唐のモノ・情報の入手。

3) 反対を押し切って渤海使高承祖らを入京させる わずか7日間の在京

・天長3年(826)5月8日、入京、京の鴻臚館に入る。

5月14日、淳和天皇の渤海王宛勅(国書)を得て出京、歸國

・淳和天皇は渤海使に会っていない可能性が高い

入京直前の5月1日、淳和天皇第一皇子恒世親王死去、入京中の5月10日に葬送。淳和天皇は「悲痛し、久しく朝を視ず」という状態の中での入京強行。

⇒恒世親王・・・嵯峨から淳和に讓位されたとき、皇太子に指名されるも辞退。第二皇子の恒貞親王が立太子。

4) 淳和天皇の勅(返書)にみえる貞素

・5月14日付勅書には「僧貞素の所業に不行き届きがあったが、高承祖はそれをすべて承知した」と記している。→貞素をめぐって何らかの動きがあった。

・貞素とはだれか？

【2】日本・渤海・唐をつないだ渤海僧貞素

1) 円仁の『入唐求法巡礼行記』にみえる貞素と靈仙

⇒円仁・・・承和5年(838)の遣唐使とともに渡唐。天台山、五台山などを巡礼、長安で勉強。武宗皇帝による会昌の廃仏(845)に遭い、承和14年(847)に新羅海商の船で歸國。歸國後は比叡山延暦寺の天台座主となって、天台宗発展の中心になった。在唐中の日記が『入唐求法巡礼行記』。

・開成5年(840)7月3日、円仁は、かつて日本僧靈仙が住んでいたという五台山の七仏教誡院を訪れ、板に書かれて壁に打ち着けられていた貞素の「日本国内供奉大徳靈仙和尚を哭する詩ならびに序」を発見する。

・「日本国内供奉大徳靈仙和尚を哭する詩ならびに序」に書かれていたこと(要点のみ)

長慶2年(822)、靈仙は五台山に入った。

長慶5年(825)、日本の天皇が長安に送った金百両と勅書を、貞素が五台山の靈仙のもとに届けた。靈仙から天皇への返礼として仏舍利1万粒と新経2部、上表文を貞素は託された。貞素はそれを持ってはるばる日本に渡った。日本から歸るとき、新たに靈仙への金百両を託された。

太和2年(828)4月7日、貞素は五台山に靈仙を尋ねたが、すでに亡くなっていた。靈仙の死を知って嘆き悲しんだ貞素はこの序と詩を書いた。

2) 高承祖の來日と入京強行の理由

・嵯峨天皇が靈仙に送った金の返礼として貞素に託された仏舍利・新經・上表文を天皇に献上するため。

3) 靈仙とは何者か？

・延暦 24 年 (805)、遣唐使船で空海・最澄らとともに渡唐。

長安の醴泉寺に入る。

・元和 6 年 (811、弘仁 2)、般若三藏の『大乘本生心地觀經』漢訳に中心的役割を果たす。

石山寺蔵『大乘本生心地觀經』の奥書に、

筆授・漢訳としてみる。

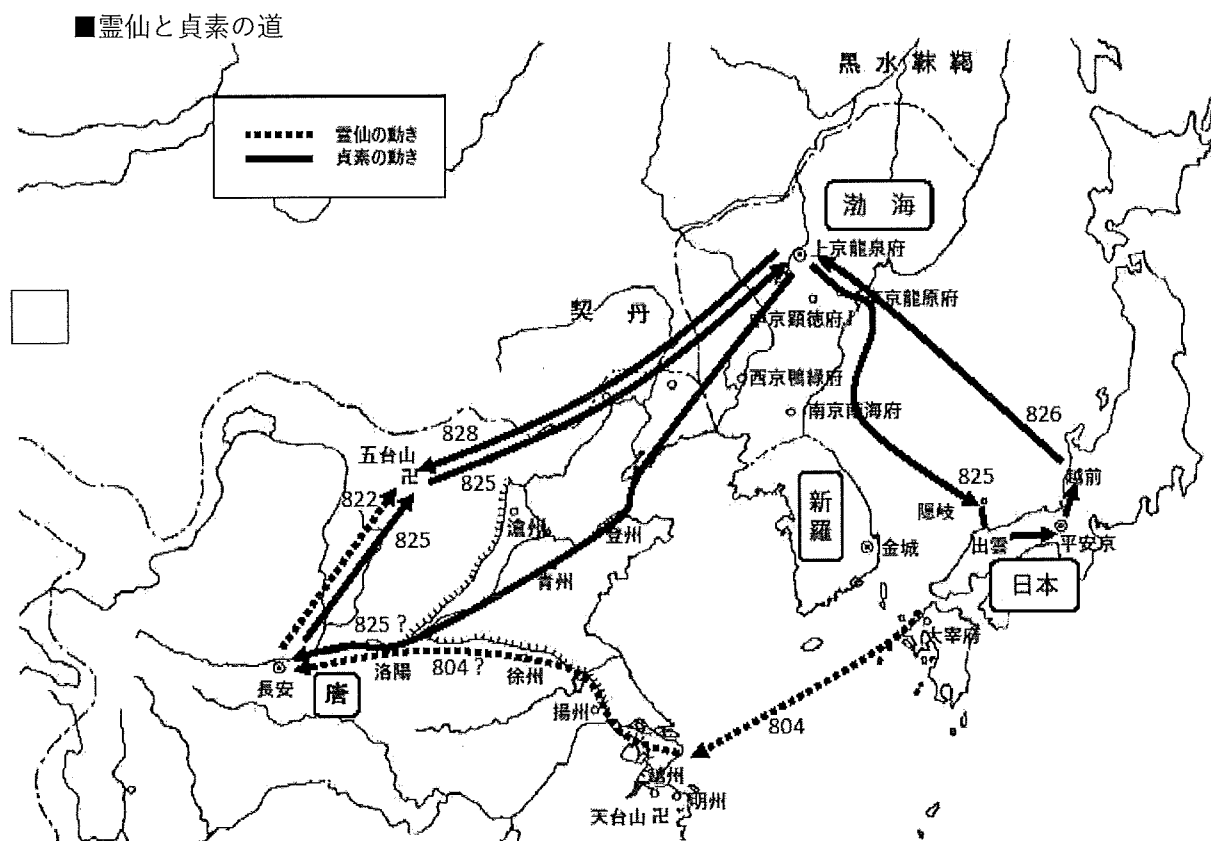
☞筆授・漢訳・読みあげられたサンスクリット語を聞き取りながら、それを直ちに漢文に翻訳して書いていく役目。

・日本僧が漢訳した唯一の經典。

・日本僧で唯一、「三藏」と称される。

→宗教的偉業として日本に伝わり、嵯峨・淳和からの送金に。

貞素が託された「新經」2部とは、この靈仙の名が記された『大乘本生心地觀經』か。



4. 出雲に來た渤海使楊中遠—広がる渤海人の活動と日本海沿海地域

【1】渤海使楊中遠の出雲国来航

1) 楊中遠、出雲に來る

貞觀 18 年 (878) 12 月 26 日、渤海使楊中遠一行 105 人、出雲国に來着、島根郡に安置。

→存問領客使として卜部(中原)月雄・大春日安名、通事春日宅成を出雲国へ派遣

貞觀 19 年 (879) 4 月 18 日、渤海国王啓(国書)と中台省牒の写しが太政官に送られ、天皇に奏上された。

6 月 25 日、入京が認められず、出雲国から帰国。国書や信物(天皇への進上品)も返却。

・入京が認められなかった理由…前回入京した渤海使楊成規から 4 年しかたっていない。

・楊中遠來航の目的—渤海国遣唐使救助に対する謝恩だという

【2】渤海国遣唐使をめぐる

1) 渤海国遣唐使、薩摩国に漂着

・貞觀 15 年 (873) 3 月 11 日、渤海国遣唐使門孫宰、崔宗佐らの船 2 艘が薩摩国甑島に漂着。

→新羅海賊船と疑われ、大宰府へ廻漕。途中で 1 艘が逃走するも天草に漂着。

・所持品を調査した結果、本当に渤海国遣唐使だと判明。船を修理、食料を支給して出航させた。

2) 渤海国遣唐使の目的、唐朝廷の徐州平定を祝賀するためという

・徐州平定とは…咸通 10 年 (869、貞觀 11) 龐勛の乱平定のこと

・龐勛の乱平定後も、山東半島南部の不安定さは続く。

3) 崔宗佐、石見に現れる

・貞觀 16 年 (874) 6 月、崔宗佐に 56 人が石見国に來着。

食料を支給されて出航。

【3】渤海人の活動の拡大と日本海・山陰

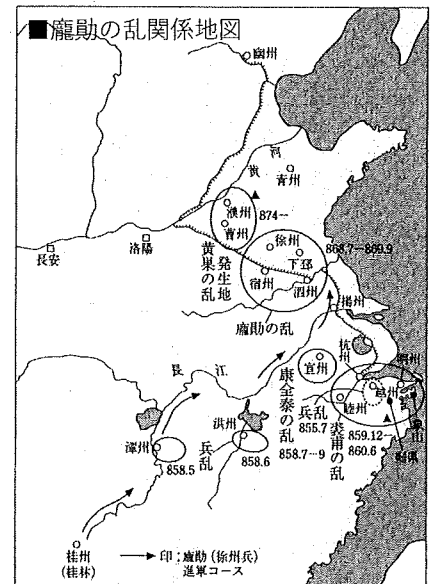
1) 出雲に來た渤海使楊中遠の持参品、返却された玳瑁の酒杯

・通事春日宅成の言葉(国史に記載)

自分がかつて唐にいたが、こんな珍奇なものは見たことがない。

返却するのは惜しい。

・玳瑁の酒杯を渤海使が持参したことは何を意味するか？



(石見清裕 2009)

2) 玳瑁はどこから來たか？

・玳瑁(タイマイ)の生息域

現在、インドネシア、セイシェル、モルディブなど

・唐代の玳瑁産地(『新唐書』)

嶺南道崖州珠崖郡(現在の海南島)、

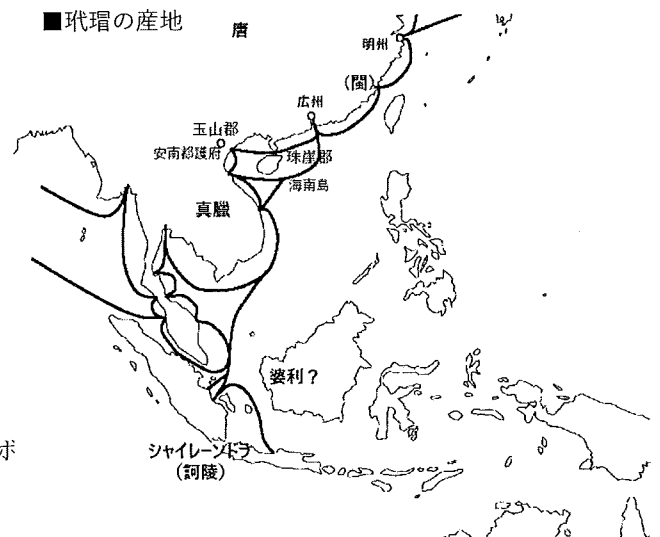
嶺南道陸州玉山郡(現在のベトナム北部)

訶陵(シャイレンドラ朝シュリーヴィジャヤ)、

[ボロブドゥール寺院を作った王朝]

婆利(カリマンタン島のあった国か)

・唐皇帝への玳瑁献上(『冊府元龜』)真臘国(現在のカンボ)



・渤海の玳瑁入手先 唐を経由して入手 or 唐南部～東南アジア方面から直接入手

3) 門孫宰、崔宗佐らはなぜ、薩摩、石見に現れたのか? — 渤海の活動領域の拡大

- ・渤海と唐を結ぶルート 遼東半島→海路→山東半島(登州)→洛陽・長安
- ・登州は、渤海・新羅との交通の窓口。唐の対渤海・新羅外交や貿易は登州で管理。
- ・龐勛の乱後の山東半島周辺不安定さ
- ・東シナ海域での渤海商人の活動、南シナ海方面へも

ex) 李延孝の活動

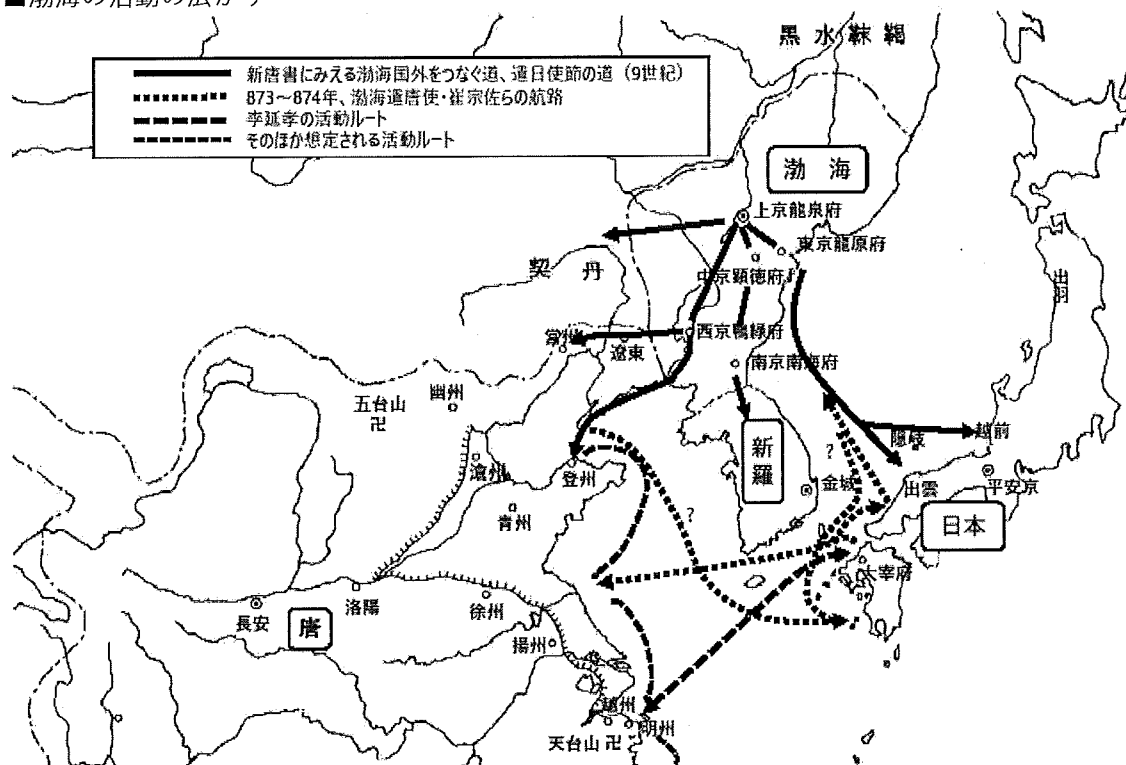
仁寿3年(853)、入唐僧円珍を博多から福州まで運んだのが史料上の初見

元慶元年(877)に、帰国する日本僧円載を乗せて東シナ海中で遭難するまで、数年おきに博多と唐の福州・明州などとの間を往来。多くの人・モノ・情報を運ぶ。

日本の国史などには「唐商」と記されるが、円珍が唐の地方官に提出した文書に「渤海国商主」と記している。

- ・日本海—朝鮮海峡—東シナ海—唐 ルートをとったのが門孫宰・崔宗佐らではないか。

■渤海の活動の広がり



むすびにかえて

・山陰地域からの視点—渤海との交流という、これまで北陸(加賀・能登・越前)ばかりが注目されていた。

・渤海との外交の舞台としての山陰地域

これまでは入京できなかった渤海使はほとんど注目されなかった。「放還」という表現から門前払いのイメージ。実際は、來着地で国司と政府から派遣された使者との間で、交渉。持参した国書・文書の写しが政府に送られ、天皇にも奏上されている。天皇や政府は国書の内容を把握している。入京しなくても、來着地と京を結んで外交が行われていた。

・民族的多様性の視点も必要—來日した渤海使のなかにはソグド人もいる。

ソグド人—中央アジアのサマルカンド周辺から中国へ広がった民族。商業や軍事面で活躍。
安史の乱の安祿山もソグド人。

・東アジア、東部ユーラシアのネットワークのなかで、渤海と山陰地域をみる視点

参考文献

- 大日方克己 2019『出雲に來た渤海人』(ふるさと文庫)、松江市
松江市 2005『松江市史』通史編1 自然環境・原始・古代 第9章(執筆大日方)
- エルンスト=V=シャフクノフ 1998 「北東アジア民族の歴史におけるソグド人の黒貂の道」『東アジアの古代文化』96
石井正敏 2001『日本渤海関係史の研究』、吉川弘文館
石山寺 『石山寺古經聚英』法蔵館
石見清裕 2009『唐代の国際関係』(世界史リブレット) 山川出版社
大橋泰夫 2016『出雲国誕生』(歴史文化ライブラリー)、吉川弘文館
鈴木靖民・金子修一・石見清裕・浜田久美子 2014『訳註 日本古代の外交文書』八木書店
東北亜歴史財団 2009『渤海の歴史と文化』(濱田耕策監訳)、明石書店、原書は2007(韓国)
東北亜歴史財団編 2015『古代遼東海交流史2 渤海と日本』(羅幸柱監訳)、明石書店、原書は2010(韓国)
濱田久美子 2011『日本古代の外交儀礼と渤海』同成社
濱田耕策 2000『渤海国興亡史』、吉川弘文館
古畑徹 2017『渤海国とは何か』、吉川弘文館
三上次男 1990『高句麗と渤海』、吉川弘文館
渡辺三男 1987『靈仙三蔵—嵯峨天皇御伝のうち』『駒澤国文』24
李健超 2007『空海・橘逸勢の長安留学』矢野健一・李浩編『長安都市文化と朝鮮・日本』汲古書院

渤海使表

	來着年月日	大使	人数	來着地	安置供給地	入京	日本側使者同行	
							來航	帰国
1	神龜4(727).9.21	高仁義	24	蝦夷境		○		○
2	天平11(739).9.13	胥要德		出羽国		○		○
3	天平勝宝4(752).9.24	慕施蒙	75	越後国佐渡嶋		○		
4	天平宝字2(758).9.18	楊承慶	23	越前国	越前国	○	○	○
5	天平宝字3(759).10.18	高南申		対馬嶋		○	○	○
6	天平宝字6(762).10.1	王新福	23	越前国佐利翼津	越前国加賀郡	○	○	○
7	宝龜2(771).6.10	老万福	325	出羽国野代湊	常陸国	○		○
8	宝龜4(773).6.12	烏須弗		能登国		×		
9	宝龜7(776).12.22	史都蒙	187	越前国加賀・江沼郡	越前国加賀郡	○		○
10	宝龜9(778).9.21	張仙寿		越前国三国湊		○	○	○
11	宝龜10(779).9.14	高洋弼	359	出羽国	出羽国	×		
12	延暦5(786).9.18	李元泰	65	出羽国	越後国?	×?		○
13	延暦14(795).11.3	呂定琳	68	蝦夷地志理波村	越後国	○		○
14	延暦17(798).12.27	大昌泰				○		○
15	大同4(809).10.1	高南容				○		
16	弘仁元(810).9.27	高南容				○		○
17	弘仁5(814).9.30	王孝廉		出雲国		○		
18	弘仁9(818).?.?	慕感德				×?		○?
19	弘仁10(819).11.20	李承英				○		
20	弘仁12(821).11.13	王文矩				○		
21	弘仁14(823).11.22	高貞泰	101	加賀国	越前国?	×		
22	天長2(825).12.3	高承祖	103	隱岐国	出雲国	○		
23	天長4(827).12.29	王文矩	100	但馬国	但馬国	×		
24	承和8(841).12.22	賀延福	105	長門国		○		
25	嘉祥元(848).12.30	王文矩	100	能登国	加賀国	○		
26	貞觀元(859).正.22	烏孝慎	104	能登国珠洲郡	加賀国	×		
27	貞觀3(861).正.20	李居正	105	隱岐国→出雲国島根郡	出雲国	×		
28	貞觀13(871).12.11	楊成規	105	加賀国		○		
29	貞觀18(876).12.26	楊中遠	105	出雲国	出雲国島根郡	×		
30	元慶6(882).11.14	裴頌	105	加賀国	加賀国	○		
31	寛平4(892).正.8	王龜謀	105	出雲国		×		
32	寛平6(894).12.29	裴頌	105	伯耆国		○		
33	延喜8(908).正.8	裴璆		伯耆国		○		
34	延喜19(919).11.18	裴璆	105	若狹国→越前国	越前国松原駅館	○		